教育場面における夢の活用(I)

——その背景としてのフロイトとユング——

細部国明

まえがき

夢は人類が始って以来，綿々として絶えたことのない人間の体験である。夢は魂を扱う宗教[1]と深い関係にあり神託や夢告として大事にされる一方で，はかないもののたとえとしてのイメージも持っている。人間の生活の多くの領域に関連し，その意味もさまざまに受け取られていた夢にコペルニクス的転換とも言えるほどの変化が生じたのは，1900年，S.フロイトによって著わされた「夢判断」[2]によってである。フロイトは，夢は巫女や専門家でなくてもそれなりの手続きを踏めば，誰でも取り扱えるものであるということを多くの事例で実証し，その技術や解釈法を創りあげた。その強固な一大体系は「精神分析」と呼ばれ，人間の無意識や夢を学ぶ者にとって大いに参考にされた。その後，精神分析的な考え方は，医学，心理学に限らず，大衆性のある文学[3]などを通じて，多くの人々の間に浸透していった。他方，夢の生理学的研究[4]によって，人間は覚醒と睡眠を繰り返し，夜ごと夢を見ていることが明らかになり，夢の神秘性ははぎとられた。

精神分析学や夢の生理学という科学の網を一度くぐりぬけてきた夢は，カウンセリングや感受性訓練などと同様に，人格変容及び人格の成長のために有効な手段の1つとして積極的に活用された。そのほとんどは治療的分野での活用であったが，教育分析（training analysis）[5]のようにいわゆる正常者への活用がないわけではない。個人的には多くの作家や芸術家[6]がその創造的価値を求めて夢を利用している。しかし，健康で充実した人生を送りたいと願う「一般

の人々」に役立てる方向で夢の活用を工夫したF．S．パールズ[7]やC．S．ホール[8]のような研究報告は非常に少ない。その幾つかの原因として 1. これまで自然科学的な因果論的考察法が重んじられていたこと，2. 諸々の条件が混入している複雑な日常場面で夢が活用されなければならないこと，3. プライバシーを守るため事例公表の困難さ，などをあげることができる。拙著もわずかの実践的研究[9]，またそれ以後の実践的試みを通して，夢はその活用の仕方によっては有効な教育的手段になり得ると実感しているが，小論でもおもにこれまでに公表されている夢とその逸話でもって考察するのは 3. の理由による。

夢を実生活のレベルで活用できるように工夫していくとき，その理論的背景として非常に有用なのは，夢の科学的操作の道を開いたフロイトの見解よりも，むしろユングの見解である。ユングはフロイト同様に，無意識への通路として夢の重要さを認めているが，加えて，夢に教育的役割を賦与しているのが特色といえる。「フロイトの言うように，夢分析は無意識への大道である[10]，……それは心をあつかう教育者や医者にとっては貴重きわまりない道具なのである。」[11]「私は貴重な指導源としてのみならず，とても効果的な教育手段として，夢を高く評価したい。」[12] 以上はユング自身のことばであるが，J. ヤコービ[13]は分析心理学[14]を評して「医学的に効果的な側面とともに，なおひとつ，こころ(Seele)を導き，人間を教育し，個性を陶冶する極めて卓越した能力を有しているのである。」と述べている。

ユング理論の方が，夢を日常の教育場面に活かしやすいのは，ユングの自己(Selpst）や普遍的無意識（collective unconsciousness）の概念，意識と無意識の関係のあり方，宗教に対する考え方など，フロイトと異った理論体系，ないし人間観があるわけだが，ユングはフロイトの「精神分析」との違いを明確にするため，自分の立場を「分析心理学」（analytical psychology）[14]と呼んでいる。分析心理学において，夢が教育の名に値するには，実践に必要な如何に how を伴っており，そこには具体的な働きかけが有り得るはずである。それが端的に具現されているのは事例であると思われる。

ここに両者の相違を実際の夢で考えてみようとするのは，そもそもどちらの見解が正しいかという視点からではなく，夢を実践に活かす立場から，どちらがよりよいかという実際上の必要であって，理論上必要だというようなものではない。被教育者の成長を助けようと思うなら，現実的な要請から，彼をうまく援助するための方法が必要である。今回は，精神分析と分析心理学の違いの中でも，願望理論と補償理論について考察する。ユングの補償の概念は，夢をどのように説明するのか，また，何よりも，夢を夢見者の実生活にどれ程活かすことができるのかを，具体的な夢の事例を通して見ていく。小論ではそれをフロイトの願望理論と比較しながら考えてみたい。

1. 願望充足と補償

夢に神のお告げや人間の能力を越えたものを見る傾向があった昔の人々に対し，フロイトは夢に夢を見る人の心理的な原因を追求し，夢は「抑圧された願望」[15] から出ていると結論づけた。その抑圧された願望は夢を見た人の意識には何らの快感をもたらすことができないので，検閲されたり歪曲されたり種々な「夢の作業」[16] を通して夢に現われてくるというのである。それ故，フロイトにとって夢の解釈とは，夢の「顕在内容」[17] の中に隠されている「潜在内容」[17] を見つけ出すことである。「夢は（抑圧され排斥された）願望の（偽装した）充足である」[15] というフロイトの理論は非常に強固で筋が通っており，明確でわかりやすい。

それに対しユングは，物事を両面から，あるいは幾つものレベルから見ようとし，1つに決めつけない傾向があり，さらに，彼の分析心理学は体験（experience）を通して知るという性質が強いので，フロイトの理論的明快さと比べて，非常にわかりにくい。夢に関する見解も多分にそうである。ユングは「夢そのものは何事をも意図していない。糖尿病患者の血液中の糖分やチフス患者の熱の如き」[18] 生理的現象のようなもので「無意識の実状が象徴的形式をとって行う自然発生的な自己表出（a spontaneous self-portrayal）である」[19] という。この見解の特徴は，フロイトの願望説と異なって，夢の意味について断定的なこと

を言っていないことである。

しかし，われわれが，幸いに自然のあらわれ（the signs of nature）を正しく解釈する術を心得ているときは，単なる自然的事実である糖分や熱を一個の警告と見ることができる[18]ように，無意識のうちに，あるがままに表出された夢を，意識的な認識に対してなにか大切なものを警告しているのではないかという観点からも見ることができる。そのような観点から夢を考察するとき，夢の一般的機能を補償（compensation）と呼んでいる[20]。補償によってユングが意味するものは何かを見てみる。「夢は意識状況と一致する時もあれば対立する時もあり，その他様々な表われ方をする。夢のこのような自律的なあり方を表わすのに，唯一つ適切な概念は補償の概念だと思う。夢のあらゆる作用を要約できるものはこれしかない。補償（compensation）は補充（complementation）とは厳密に区別しなければならない。補充はあまりにも狭くて限定的な概念であって，夢の機能を説明するには不充分である。なぜなら，補充は多かれ少なかれ機械的な補足関係を示しているからである。それに対し，補償は，調整（adjustment）や修正（rectification）を生じさせようとして，さまざまな情報や見解を調節したり，対置させたりすることを意味する。」[21]

言わば，フロイトは自然科学的な原因指向的（of causality）[22]考察法で，なぜ why？夢を見るのかを問い，その動機に，無意識の願望を見い出した。それに対しユングが提唱しているのは，目的指向的（of finality）[22]考察法であり何のために for what？彼はそのような夢を見るのか，夢はどのような意識的態度を補償しようとしているのか，という疑問を投げかければきっと得るところがある[23]，というのである。

2. 願望理論による夢の扱い

はじめに願望理論による夢の扱い方を考察する。フロイトの著には多くの夢が記されているが，ここでは，夢を見た人の意識状況をも知ることができるユングの夢を取り上げる。フロイトとユングが全く同じ夢にかかわり合って，その見解の相違がユング側からだけではあるが，公表されている次の夢は，二人

の夢に対する立場の違いを実際に扱われた夢を通して検討しようとする者にとっては貴重な資料となる。〔夢1〕はフロイトの代表的な夢分析の1つであるイルマの夢[24]と同様に少し長い夢であるが，ユングがフロイトと共に仕事をしていた時に見た夢である。

〔夢1〕 私は夢の中で"自分の家"にいた。それはどうも2階であったらしく，こざっぱりして，気持ちのよい居間で，18世紀風の家具が置いてあった。私はこのような部屋を前に見たことがあったので，驚いてしまった。そして，1階はどうなっているかと，気になりだした。で，階下へおりて行くと，薄暗い，鏡板の壁でかこまれた部屋が見つかった。16世紀あるいはそれ以前のものと思われるどっしりした家具がそなえてあった。自分の驚きと好奇心は，だんだんと大きくなってきた。わたしはこの家の構造全体がどうなっているのかを見たいと思った。そこで，地下室へ行ってみると，扉が開いていて，そこに石の階段があり，それは，何か非常に大きいアーチ型の天井をもった部屋に通じていた。その床は大きい石の平板でできており，壁は非常に古いように見えた。私はそのモルタルを調べてそれが煉瓦の破片を混ぜ合わしたものであることがわかった。明らかにこの壁はローマ時代に起源をもっていた。私はますます興奮した。その片隅には，石畳に鉄の輪がついているのが見えていた。そこで石畳を引っ張ると，もうひとつの狭い階段が石の洞窟のようなところへ通じており，そこは先史時代の墓のようで，ふたつの頭骸骨と骨が少しと陶器のかけらがあった。そこで，私は目が覚めた[25]。

ユングは解剖学研究所に勤めていたこともあり，比較解剖学と古生物学に関する本来的な関心から発展してきて，当時は，化石の人間の骨に興味を持っていた。とくにそのころよく議論されたネアンデルタール，あるいは，より以上の論議のもとになったデュボアのピテカントロプスの骸骨に魅せられていた，というのがこの夢に対するユングの連想の要約である。しかし，頭骸骨とか骨についてのそのような話題は，フロイトにあまり受け入れられないことを知っていたので，言わなかった。自分自身の心理学に関してまだ確信がなかったユ

ングは，そのためにフロイトとの友情を失うことを恐れたのである。この夢に対するフロイトの見解を，彼の著に見出すことができないので，ユングに語らせると次の如くである。「この夢で，主にフロイトが興味をもったのは2つの頭骸骨であった。彼は幾度も2つの頭骸骨に話をもどし，それと関連した願望を見出すようにと私を促した。……彼は私にこれら死体に関するお喋りはすべてが，私が彼に対して早死の願望をもっていることを意味していると確信したと言った。……私はそういう解釈に激しい抵抗を感じた。……『私の妻と義妹です[26]』結局，私はその死を願うに価する誰かの名前を挙げなければならなかったのだ」[27]

実際場面でフロイトがどのように対応して，相手はどのように感じていたかを知ることは仲々困難であるが，フロイトやフロイディアンから教育分析を受けたブラントン[28]やファラディー[29]などが著を表わすにつれ，少しずつ実際場面のやりとりが明らかになりつつある。フロイト自身の著ではドーラの事例[30]に実際場面が記されている。それらには，得てして〔夢1〕の事例に示したように解釈に対する夢見者の諒解不能感や抵抗が見られるが，「願望充足」理論がそもそも，夢見者の意識から排斥された不快な願望を「自由連想」[31]によって探し出すことをめざしていることを考えれば，当然のこととも言える。何はさておき，夢見者当人が認めたくない願望を他人の前に持ち出さなければならないとなると，そこでは並々ならぬ自我の強さと勇気を必要とする。またその願望の発見に到達するまでの過程では，自由連想を効果的に進めるため夢見者の意識的選択力を弱める場面構成[32]をするなど，フロイトの願望理論は，多くの面で普段の教育場面，特に集団学習になじみにくい。

3. 補償の一形式としての対立的機能

フロイトの願望理論に対して種々な批判があるが[33]，それらの中で，夢の活用を考えた場合，極めて意義あるものは，ユングの補償理論である。補償は個々の夢においてどのような表われ方をするかを見ていきたい。はじめに，補償が対立機能として現われる事例として〔夢2〕をあげることができる。ユング

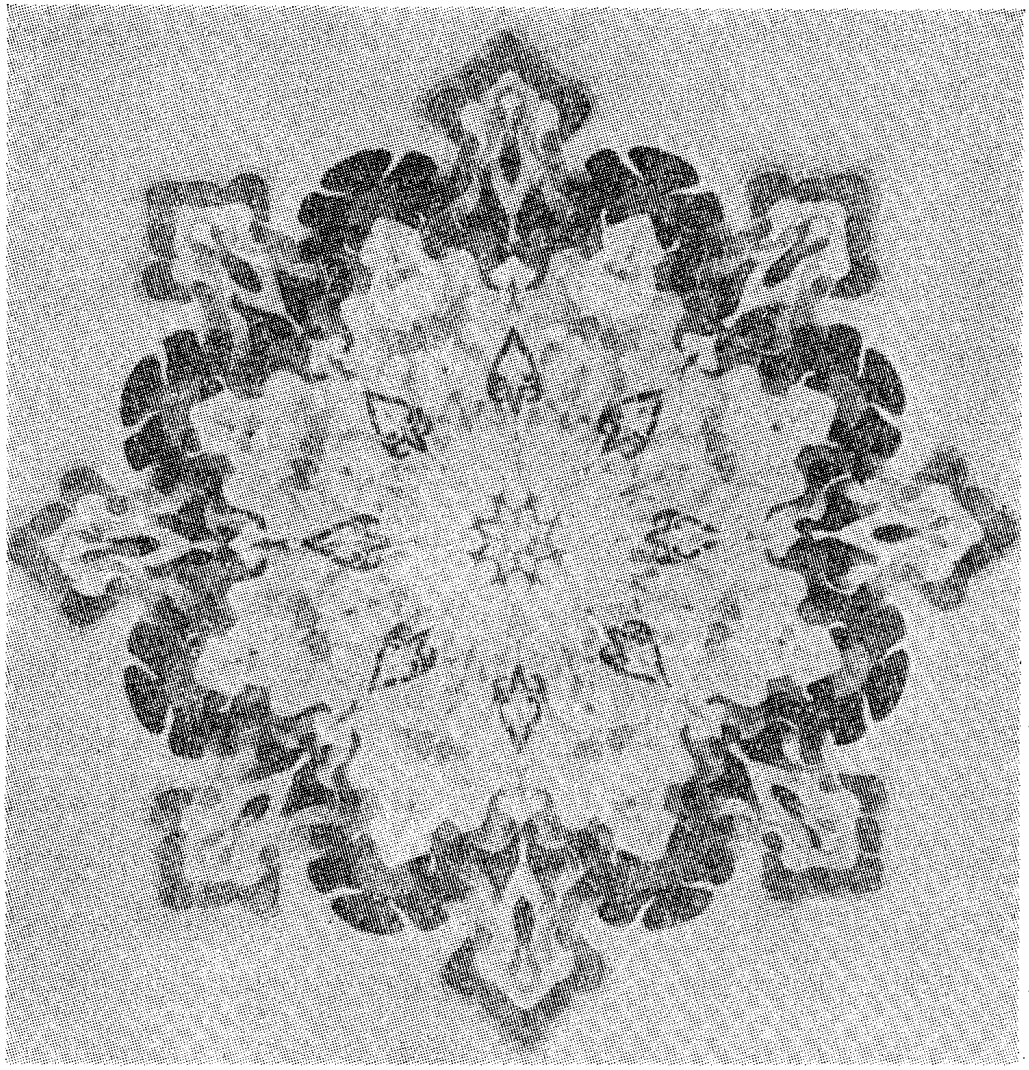
は，ひどいもめごとに引き込まれいつも派手な化粧と服装をしていた堕落した感じの女性の相談に応じていた。数週間たっても問題はうまく解決されないどころか，彼女はだんだん悲しげな様子をして無気力になってきた。彼は怒りを覚えながらも，どうすることもできなかったので，次回で，もう彼女の相談を打ち切ろうと思った。その翌日にユングは次の夢をみた。

〔夢２〕 私は急斜面の丘のふもとにある道を歩いていた。丘の上には高い塔のついた城が建っていた。その塔の欄干には夕陽に照らされて女の人が座っていた。私はその女の人をはっきり見ようとして，頭をのけぞらせたとき，頸部に痛みを感じて目が覚めた[34]。

なんとその女の人は，現在相談を受けている女性だった。彼は，どうして自分の無意識は，あの娘をあんなに見上げなければならないような高い所に置いたのだろうか？　と考えた。自分が彼女を見下しすぎていることに対する補償ではあるまいか，という考えに思い到った。翌日，彼は「ゆうべ，あなたの夢を見ました。その夢では首が痛くなるほど，あなたを見上げていなければなりませんでした。それは私があなたを見下していたことの補償なのです」と告げ，彼女に対する態度を改めた。これを機会に２人の関係は好転した。ともかく，この例は夢見者が，自分の意識全体がバランスを欠いていたのではないかということを，夢の機能を通じて気づかされ，夢内容を自分の意識に取り入れて，彼女との人間関係に活かしていった事例と見ることができる。

〔夢２〕のように「補償が対立機能という形でとらえやすくなるのは，意識の一面性が強くなればなるほど無意識から生じる内容がますます相容れないようなものとなるからである。」[35]意識状況を描写しながら，しかもそれを巧みに補償しているものとしてマンダラ（曼陀羅，Mandala）をあげることができる。それはあたかも意識に対して対立的様相を呈しているかの如くであるが，そこにはもっと積極的な意味が見出される。マンダラ図形の１つを図―１に示す。「マンダラ象徴は人類の最古の宗教的象徴の１つであって，すでに旧石器時代に存在していたと考えられる。単に時代的に古いばかりではなく，世界の至る

図—1 マンダラ図形



あらゆる花の中でも最も素晴らしいものとして描かれている黄金の華。
(C. G. Jung and L. Wilhelm 1929 湯浅泰雄他訳「黄金の華の秘密」人文書院 p. 113)

所に見出される性質のものである」[36]西洋ではキリスト教，東洋ではチベット，北アメリカのプエブロ・インディアンでは砂絵を中心に現われているが，それらは個人の心に現われるマンダラ象徴の重要性に一致している[37]。そのようなマンダラ象徴の解釈に踏み切るまでユングは14年間の歳月を費やしたと述べている。これらのマンダラは意識状況の対立や葛藤が著しいときに「夢の中に現われるか，目覚めているとき絵のような幻覚像の形で現われるかのどちらかであって，しばしば，意識の対立や葛藤を極めて明確に補償している」[38]このマンダラ象徴の出現は，いわばプシケーの混乱状態を，対立するものを持ちなが

らも中心を有している秩序ある世界に変化させようとする表われであり，「これは明らかに自然の自己治癒(self-healing)の試みであって，意識的な反省というようなものではなく，本能的衝動から生じてきたものである」[39]「マンダラ図形の制作過程では，一見統一しえない対立物を一堂に集め，絶望的と思われる分裂に橋をかけようとする試みがしばしば示されるのであるが，その方向の試みだけでも制作者によい影響を与える。しかし，それは自然に生じた試みであって，それらのイメージを作為的に模倣してもなにも期待できない」[40]という。次にマンダラ夢の事例を見てみる。ある若い学問的教養のある男性の400以上に及ぶ夢の系列の中の1つである。

〔夢3〕 ある見知らぬ女が夢見者を追いまわしている。夢見者はいつまでも円を描いて走り続ける[41]。

「見知らぬ女ないしアニマ[42]は無意識を代理するものであって，無意識が夢見者を圧迫し続けて遂に円運動に追い込んだのである。円運動を始めたということは，自我とは異なる中心点がすでに潜在的な形で与えられているということである。自我がこの中心点の周りを廻っているのである。」[43]この夢を図形化すれば，マンダラ象徴に類似してくる。これは人格の新たな中心の形成過程を示している象徴が夢に現われていると解釈される。

4. 意識と同一方向の様相を呈する補償夢

上に見てきたように意識の一面性が強くて，補償が対立機能の形で表われるような場合は，むしろ極端な場合である。「普通は，無意識による補償は意識の対立物ではなく，むしろ意識的態度を調節(balancing)あるいは補充(supplementing)するものである。たとえば，無意識は，部分的には意識によって集められた材料を使用しながらも意識によって抑制されたものを夢の中で補っているのである。」[44]この種のものとしては次の夢をあげることができる。

〔夢4〕 私は高い山を登っている。雪におおわれた急斜面である。どんどん上に登っていく。素晴しい天気である。登っていく程，気分がよくなる。この

ままいつまでも登り続けられたらなあと思う。頂上に着くと，私の幸福感は実に大したもので，さらに虚空に向って登れそうな気がしてきた。実際，天へ登れるのだ。私は空中を真直ぐ登っていき，全く恍惚状態になっているところで目が覚めた[45]。

この夢を見たのはユングの同僚である。下記の説明や会話の中に夢を見た人の意識状況をある程度知ることができる。「彼は一種の補償作用として」[20]危険な山登りに，ほとんど病的と思われるほどの情熱を傾けていた。彼は〝自分より以上のものになること〟を探し求めていたのである。彼はたまにユングと一緒になると，きまってユングの夢判断をからかっていた。ある日街で出合うと「やあ，相変らず夢判断ですか。ときに，ぼくはこの間，馬鹿馬鹿しい夢を見ましたよ。こいつも何かの意味があるんですかな」[45] と言って語ったのが〔夢4〕である。夢を補償現象としてとらえ，夢の警告を活かそうとするとき，夢見者の意識状況に対し，現実にどのような対策がなされうるかを考えることは重要なことである。ユングは次のように答えた。「困りましたね。あなたはどうやら登山は止められないようですから，今後独りでゆくことだけは，ぜひとも止めなさいよ。ゆくときには，案内人を2人連れていって下さい。案内人には絶体服従を誓うことですね」彼は「むずかしい相談ですね」といって別れた。このユングの回答を意味あるものと考えるなら，ユングの「人間のタイプ」[46] 論から考察するのが適当であると思われる。同僚の意識には抑圧できない特殊な繋縛の対象である山へ行くことを止められないとなると，次に考えられたことは，案内人を2人連れていき，しかも案内人には絶体服従することであった。同僚の意識と補償関係にある「無意識の態度（the attitude of the unconscious)[47]」から現われてくる要求は，もはや自分自身の意識の統制をいつでも破壊できる程の強さになり得る状態にあったと考えられる。無意識の圧倒的な影響力に同一視せざるを得ない彼の自我は，案内人1人の意見にはとても従い得ないことは充分予測されたものと思われる。彼は2か月後独りで登山して雪崩の下敷きになったが運よく助かった。それから3か月後，案内人を付

けず，友人と出かけ，転落し死亡した。そこには幾分かの偶然の要素もあり得るだろうが，これはあらゆる意味での恍惚状態である。

フロイトにとって，意味のあるものは夢の背後にある潜在観念であって，夢はそれを隠している，いわゆる前面建築にすぎない。死への傾斜を示しているこの事例を，フロイトの観点からみれば，生への願望と対比される「死への願望」[48]，すなわち，生体は緊張力の完全な除去に向かうような無機的状態に戻ろうとする願望が，この夢に隠されていることになるのであろう。これに対し，ユングは夢の中で潜在観念が仮装されたり歪曲されがちであるという見解を否定し，山で危険な状態に合いそうだという夢の顕在内容そのものに意味をおく。一般的には夢の顕在内容は現象的実在である。よって「夢内容はまず厳粛な事実（an actuality）としてまじめに受け取るべきものであり，その内容自体も決定的な参加要因として，意識的心構えの中へ受け入れられるべきものである。その補償を無視し続ければ，そのような補償を呼び出した意識的構えがそのまま持ち続けられることになるので，夢内容はますます現実味（still more actual）を増してくる」[49]。このような場合，夢の補償的機能と予見的機能（prospective function）を区別して考えることも可能である[50]。日常場面で夢を活用しようとする場合，読解しにくい文献より読解できる文字で書かれた文献の方が扱いやすいように，願望理論で重視される夢の潜在内容より補償理論で重視される顕在内容の方が夢を見た人にとって扱いやすい時が多い。次に述べる夢は，その前半は意識と同一方向を描写しているが，夢の後半には対立的様相を呈している。ネブカドネザル王は，メソポタミアとエジプトを征服したので，本当に自分はとてつもなく偉大であると思った。その時に見た夢である。

〔夢5〕 地の中央に一本の木があって，そのたけが高かったが，その木は成長して強くなり，天に達するほどの高さになって，地の果までも見えわたり，その葉は美しく，その実は豊かで，すべての者がその中から食物を獲，また野の獣はその陰にやどり，空の鳥はその枝にすみ，すべての肉なる者はこれによって養われた。

わたしが床にあって見た脳中の幻の中に，ひとりの警護者，ひとりの聖者の天から下るのを見たが，彼は声高く呼ばわって，こう言った，『この木を切り倒し，その枝を切りはらい，その葉をゆり落し，その実を打ち散らし，獣をその下から逃げ去らせ，鳥をその枝から飛び去らせよ。ただしその根の切り株を地に残し，それに鉄と青銅のなわをかけて，野の若草の中におき，天からくだる露にぬれさせ，また地の草の中で，獣と共にその分にあずからせよ。またその心は変って人間の心のようでなく，獣の心が与えられて，七つの時を過ごさせよ[51]。

ダニエルはその夢を解き明かし，王に次のように述べている。「それゆえ王よ，あなたは私の勧告をいれ，義を行って罪を離れ，しいたげられる者をあわれんで，不義を離れなさい。そうすれば，あるいはあなたの繁栄が，長く続くかも知れません」[52]。しかし，自分の力を誇っていた王はその勧告を受け入れなかった。その後，王は夢で示されたように体は天の露にぬれ，草を食べ獣のような生活を送るようになった。この夢の中の木[53]は後半で心を持ったものとして人格化されているので，ダニエルの解釈通り王その人と考えるとことが可能である。王である木があまりにも伸び過ぎるなら，その木は倒れるのが自然の状態である。補償は「心的装置に固有な自己統御作用（inherent self-regulation of the psychic apparatus)[44]」であり，積極的に意味を見出そうとするなら指示である。夢内容の大要がネブガドネザル王の意識を補償していると考えることができるのは，夢見者の意識状況やその後の状態を示す史実との照合によってである。「もし，われわれが，無意識によって補われたものを現在の意識状況に完全に適用させようとするならば，意識状況と夢の一切を知らなければならないことになる。」[44]とりわけ無意識状況に関する知識は少ない。それを補うものとしてユングは下記に述べる夢の系列を重視する。

5. 夢の系列（a series of dreams）

前後関係のない夢を1つだけ取り出すと，どんなことでも推測がつき，種々

な解釈ができる。それ故，ユングは個々の夢の解釈はあまり重く見なかった。しかし，20とか100とかの一連の夢を比較検討すると，前の夢の解釈が，後の夢によって訂正されなければならないこともあり，無意識の心の連続性がわかり夢の解釈の相対的な確実さが増してくる。そして夢の系列においては根本的な観念や主題（basic idears and themes）がずっとよく認識できる[54)55)]。

夢の系列の中で絶えず同じことが訴えられていて，その意味も明確なものとしてソクラテスの夢をあげることができる。プラトンが，ソクラテスの服毒の前後の模様やその時の会話の内容をつづった「パイドン」に次のことが記述されている。以前には決して作詩しなかったのに，ここ獄に来てからイソップの物語を詩にしたのは，いったいどういう考えからかと質問されたのに対し，ソクラテスは自分がイソップ物語を詩にしたのは，次のような夢を見たからだと答えている。

〔夢6の様子〕「同じ夢がしばしばわたしのこれまでの生活において，わたしにやって来た。その時々によって違った姿で現われはするが同じことを言って『ソクラテス！文芸を作れ，そして文芸を仕事とせよ』と告げた。」[56)]

ソクラテスは自分の哲学的思考こそ最高のものであると思っており，文芸や音楽は卑俗で大衆的なものとして軽蔑していたのであるが，そのような一面性を補償するものとしてこの夢が現れたと考えることができる。ソクラテスは，夢がしばしば，この通俗的な文芸を作れと勧告するならば，自分はそれを拒むべきでないという気持になって，手近にあって知っているイソップ寓話を詩にしてアポロに捧げたという[57)]。

この事例では，補償の仕方が2.で述べた対立機能的様相を呈している。さらに，違った姿でありながらも同じ主題が文芸を作れという目的指向的な形式で表現されており，その上，獄中にあっていろいろ内観し，詩を作るという気持にまでなりやすい諸条件がそろっていたのではないかと考えられる。しかし，大抵の場合は，夢から受け入れるべきところがあると知的に理解できても，なんらかの必然性があって夢見者の思考様式から排斥されていたものを，今にな

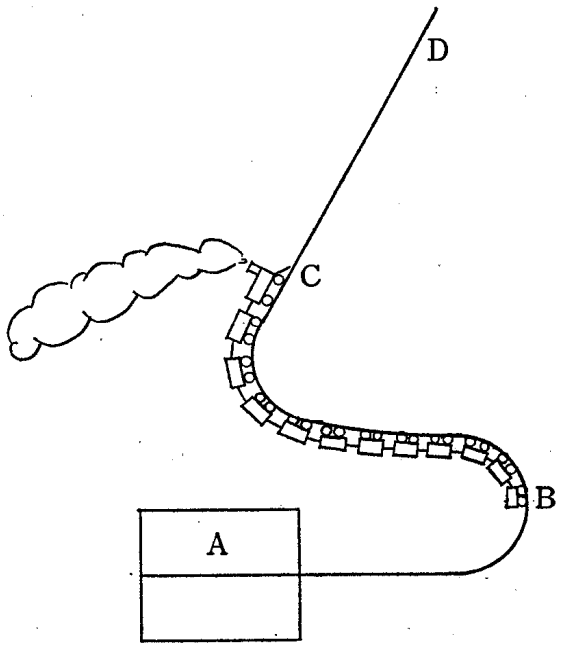
って取り入れるには，夢見者にとっては価値体系の転換を伴なうことであり，容易ではない。その気持になってそれが実行されなければならないとなると，そこに至るまでには多くの克服すべき要因が横たわっているのが普通である。次の事例はこのことを端的に物語っている。大きな公立小学校の校長が見た夢である。

〔夢7〕 私は生まれ故郷の小さな村に帰りました。私と一緒に学校へかよった連中が何人か路傍に立っていました。私はそしらぬ顔をして，その側を通りすぎました。彼らは私を見ながら『あいつはめったに村へ帰らないな』と言っています[58]。

彼は，いわゆる社会の底辺から身を起こし，恵まれた天分と大変な努力で現在の指導的な地位についた。彼は最近，恐怖感，動揺，めまいなど高山病(mountain sick[59])によく似た症状を呈していたが，大変な野心家でもあった。40歳の彼は更に次の出世を考え，その方向を決めなければならない時にこの夢を見た。この夢は「自分はどこから来たかをあまりにも無視している。たまには昔の友のことも考えなさい」と警告している，と解釈できる。次の日〔夢8〕を見た。

〔夢8〕 旅に出たくて，ものすごく急いでいる。持っていく物を探しているが，何も見つからない。時間はどんどん過ぎる。間もなく汽車は出てしまうだろう。なんとか持ち物を全部まとめ，道を急ぐ。ところが，重要書類が入っている折りカバンを忘れたことに気づく。息を切らして駆け戻り，それを見つけて駅へ走る。しかしほとんど進まない。とにかく頑張ってプラットフォームに

図—2 汽車の夢



駆け込んだのに，汽車は構内を出て行こうとしている。大変長い列車で，奇異なS形をして走っている（図―2）。前方が直線になった時，機関手がまわりを見渡さないで蒸気を噴かしたら，カーブにさしかかっている後の客車は脱線してしまう，と思った。そして，その通りになった。機関手は蒸気を噴かした，私は叫ぼうとした，後の客車はすごく傾き脱線した，大惨事である。私は恐怖で目がさめた[58]。

ここには現在居る場所から出発することを躊躇している姿がある。しかし，結局は駅へ行く。そこで夢に示されるような場面を見て目が覚める。この夢からは「汽車の後部がまだカーブを曲り切っていないのに，スチームを全開して前進する機関手のようであってはならない」という警告を学ぶことができる。彼の意識は自分の無意識から産出された夢の所見に納得することはできなかった。彼は現実生活であらゆる機会を利用し尽くそうと努力した。その結果，この夢に描かれたような破局が実現してしまった。〔夢7〕では時間的に過去をあまりにも顧みず，〔夢8〕では空間的に前方だけを見ており，また身体的症状においては高くなるという，なにか共通したモチーフが，夢見者が無意識に産出するこれらの現象の中で，繰り返し訴えられていると考えることができるのではないだろうか。

6. 補償の個人差と実在的価値

ユングは夢とその補償現象の複雑さを繰り返し述べている。「魂の補償作用(the process of psychic compensation) は，ほとんど必ず個人的性質の存在全体と密接に関連しているので，補償の性質を立証することは著しく困難である。……あるものは異種のものによって癒されるが，他の個人にあっては同種のものによって癒される。……それ故，夢による補償の種類について特別な規則を定めるのは容易ではない。経験を積むにつれてある種の基本的な特徴を徐々に明確な形で表わせるようになるかも知れないが，補償の可能性は無尽蔵にある。」[60]補償現象の複雑さを表わす1つの例として，ほとんど同じ夢がタイプの

異った人によって見られる場合をあげることができる。次の例は，ふたりの異なった人が見た夢である。

〔夢9〕 若い人たちのグループが馬に乗って広い野原を横切って行こうとしている。私は一番前にいて，水がいっぱい流れている溝を飛び越え，障害を乗り越えたところである。残りの人たちは，溝に落ち込んでしまった[61]。

この夢を見た1人は若者で，非常に注意深い内向タイプの人である。もう1人は向こう見ずな性質で，活動的で冒険的な生活をしている老人である。老人はこの夢を見た時に病人であって，医者と看護婦にひどく迷惑をかけていた。老人は実際，医者の指示に従わなかったために，自分自身を傷つけることになってしまった。

この2人の同じ夢を同じ方法で解釈することはできない。同じ解釈は，解釈者には興味があっても，夢見者にはほとんど関係がないであろう。M. ボス[62]はフロイトの因果論的説明によると，すべての夢はどうしても同一の基本的な願望に帰せられ，その解釈は機械的にならざるを得ない，と述べている。フロイトに対するこの種の批判は多い。フロイディアンから教育分析を受けていたアン・ファラディー[63]は，その紋切型の解釈に無性に腹がたったと告白している。夢を夢見者に活かそうとする場合，次のユングの見解は示唆に富んでいる。「理解とは明らかに主観的な現象である。……最終的には，分析者が理解するかどうかはどうでもいいことで，一切は夢見者が理解するかどうかにかかっている。だから，理解（understanding）は，むしろ双方の熟慮の所産である諒解（understanding in the sense of an agreement）であるべきものである。……分析者の判断が学説とは一致しても，夢見者の自発的な諒解が得られなければ，実際的には間違っている。……なぜならば暗示（suggestion）で説得するよりは，本人の意識的な判断と決定に委ねる方が，倫理的な機能を誘発し，人格の成長という点からもはるかに高級だからである。……したがって，意識的な暗示を避けようとする者は，夢見者の自発的な諒解が得られる公式が見つかるまで，すべての夢解釈は無価値とみなさなくてはならない。」[64]ユングは経験を

総合してみて，この意識的な人格の実在的諸価値（real values of the conscious personality[65]）の意義は無意識の意義におよそ等しい（about equal[66]）と考えるのが順当であろうと述べている。意識は氷山の一角にしかたとえられない精神分析の無意識重視に比べて，はるかに意識的価値を重要視する見解は，日常における夢の活用に大きく道を開いた要因の１つであると思われる。この意識と無意識に対する重点の置き方の違いは，夢を意識内容に同化（assimilation[67]）する際にも表われてくる。本人の意識条件が同一に維持されながら，彼の夢が２つの立場から扱われるという完全な比較研究は不可能であるが，夢内容が意識に取り入れられる際の２つの立場の違いを次の夢を通して考察する。この夢はある青年が見たものである。彼は父親との関係は円満であり，父親は社会的には成功者なので息子から尊敬されていた。

〔夢10〕 父が新しい自動車を運転して家から出て行く。まったく下手な運転で，その馬鹿さ加減に私は腹が立つ。車は危険な場所をあっちへ行ったりこっちへ行ったりしている。車はとうとう壁にぶつかって，ひどくこわれてしまう。私はしっかりしないと駄目だと父をどなりつける。しかし父は笑ってばかりいて，ぐでんぐでんに酔っていることがわかる[67]。

この夢を願望理論で扱うならば，青年がこの夢を見た原因を問うことになる。父親との円満な関係は上辺だけであって，ほんとうは，父親をこの夢にあるように駄目な存在であると思いたい抑圧された願望を持ち，その隠された願望を夢で充足している，というのが無理のない解釈になるであろう。そして「あなたとお父さんとの関係は見かけは円満ですが，夢に表われたのが本当の関係なのですよ」[68]と，彼が承知しそうもないような解釈を与えることになるだろう。また，そのような願望の出所を明らかにするため，「自由連想法」で青年の「過去」とりわけ，エディプス・コンプレックスの存在を疑わせる幼児期の生活史をくまなく調べ，そこに見出される父親との葛藤を新たな次元で再体験させることになるであろう。以上の扱いは願望充足理論から推測され得るものであるが，以下の補償理論からの扱いは実際に行われたものである。補償理論に

おいては，過去の父親との葛藤を敢えて探し出すようなことはしない。そして，現実に青年が父親を尊敬しており，また2人は円満な関係にあるということは事実なので，それらの実在的価値を傷つけないようにする。まず，フロイトの自由連想法とは異った「拡充法」(amplification[69]) と呼ばれる連想法で，夢内容に関するイメージを豊かにしながら，どのような意識的態度が，夢によって補償されるのかを考えていく。そしてこの青年は自分は余りにも父親に依存しすぎており，実生活での父親との関係は円満どころか円満すぎていたことに気づいていく。事実この青年は「父ちゃん子」(fils á papa[65]) と呼ばれていた。夢はそのような状況を補償していたと考えることができる。彼の持つ特別な危険性は，自分自身の現実や自主性を見失っていたことにあったのである。青年のこれからの課題は，その夢内容を「未来」に向っていかにして同化していくかに移っていく。夢は青年の危険に対する予防的価値を含んでいたと言える。

社会の規範や両親の期待に全くそむかなかったよい子が，母親や父親，あるいは教師をこの夢のごとく，酔いつぶれたも同然の状態に陥し入れることがよくある。「夢は人々の人格を補償したり，同時にそれらの現在の道が危険なものであることも警告しうる。夢の警告が無視された場合，本当の事故が生じる。」[20]

〔夢10〕の青年は，夢内容を意識に同化していくにあたって，現実に存在する父親への美しい気持や円満な関係を傷つけずに自主性を回復したが，それまでに至る具体的経過は記述されていない[70]。ユングの意識的な人格の実在的価値の重視は，「フロイトの系譜」[71]では珍らしく宗教的体験を高位におくということに通じている。

注

〔本文中，事例に関する逸話が，夢の記載されている頁の直前または直後に記載されている場合に限り，その逸話の出典・頁は省略した。但し逸話が他書にある場合や，逸話に関する key word はこの限りではない。〕

1) 旧・新約聖書には（創世紀28章ヤコブの夢，37章ヨセフの夢，41章パロの夢，マタイ伝1章2章にキリストの父ヨセフの夢など）多くの夢が記述されている。また日本最古の夢の記録といわれる「古事記」(「古事記全釈」植松安，不朽社書店，昭

和9年，p. 217～219）の夢も神と人間を結びつけるものとして現わされている。
2) Freud, S. 1900, Die Traumdeutung, London-Ausgabe, II—III（高橋義孝訳，夢判断（上・下），日本教文社，フロイド選集11—12巻）
3) 細部国明，1976 The Application of S. Freud's Psychoanalytic Theory to an Autobiographic Novel 中九州短期大学論叢 第2巻1号 pp. 117～146 は精神分析的観点から書かれた自伝的小説，"Sons and Lovers" by D. H. Lawrence をフロイト理論から考察している。
4) Aserinsky, E. & Kleitman, N. 1953 Regularly Occurring Periods of Eye Motility and Concomitant phenomena during Sleep. Science, 118, 273—274
5) 教育分析は S. Freud, 1912（古沢平作訳「分析医に対する分析治療上の注意」日本教文社，第15巻，91～106）で主張され，現在は精神分析のほとんどの学派，また，個人的には心理学者間で実施されている。その主な目的は患者・被面接者・被教育者への逆転移（Counter Transference）を防ぐためである。
6) 夏目漱石「夢十夜」，川端康成「掌の小説」，谷崎潤一郎「母を恋うる記」，デューラー「夢の風景」，アンリ・ルソ「夢」など，その数は非常に多い。
7) Perls, F. S. 1959 Gestalt Therapy Verbatim, Bantam Books.
8) The Meaning of Dream (1953) の著者で，その内容はアン・ファラディー1972（中野久夫他訳「ドリームパワー」）時事通信社，105～123 に紹介されている。
9) 細部国明 1978 夢についての一考察—教育場面における夢の活用 第39回九州心理学会発表論文集 p. 33
10) Freud, S. 1900（高橋義孝訳 夢判断(下) 日本教文社 フロイド選集12, p. 387）
11) Jung, C. G. On the Psychol. of the Unconscious, C. W. 7, Princeton University Press 1977 p. 24（以下 C. W. of Jung は特に明記しない限り，Princeton University Press 1977 による）
12) ibid. p. 106
13) Jacobi, J. 1959（高橋義孝監修 池田紘一他訳 ユング心理学 日本教文社 p. 112）
14) Jung, C. G. On the Psychol. of the Unconscious, C. W. 7, p. 112
15) Freud, S. 1900（高橋義孝訳 夢判断(上) 日本教文社 フロイド選集11, p. 189）
16) Freud, S. 1900（高橋義孝訳 夢判断(下) 日本教文社 フロイド選集12, 3～273）
17) Freud, S. 1900（高橋義孝訳 夢判断(上) 日本教文社 フロイド選集11, p. 192）
18) Jung, C. G. On the Psychol. of the Unconscious, C. W. 7, p. 101
19) Jung, C. G. General Aspects of Dream Psychol., C. W. 8, p. 263
20) Jung, C. G. 1964（河合隼雄 監訳 人間と象徴(上) 河出書房新社 p. 65）
21) Jung, C. G. On the Nature of Dreams, C. W. 8, pp. 287～288 より要約。

22) ibid. p. 246

23) Jung, C. G. The Practical Use of Dream-Analysis, C. W. 16, p. 153

24) Freud, S. 1900 (高橋義孝訳 夢判断(上) 日本教文社 フロイド選集11, 123～142)

25) Jung, C. G. 1964 (河合隼雄 監訳 人間と象徴(上) 河出書房新社 p. 77)

26) 「血縁上最も近い，人生において最も愛している人，即ち，両親，兄弟姉妹，夫婦，自分の子供に対しても復讐や死の願望をいだくのは決して珍しくない」Freud, S. 1917 (安田徳太郎訳 精神分析入門(上) 角川書店 p. 171)

27) Jung, C. G. 1963 (河合隼雄他訳 ユング自伝(1) みすず書房 225～230)

28) Blanton, S. 1973 (馬場謙一訳 フロイトとの日々 日本教文社)

29) Ann Faraday, 1972 (中野久夫他訳 ドリームパワー 時事通信社)

30) Freud, S. 1905 (懸田克躬他訳 あるヒステリー患者の分析の断片 人文書院 フロイト著作集5, 1965, 276)

31) ①Laplanche, J. & Pontalis, J. B. 1967 (村上仁監訳 精神分析用語辞典 みすず書房 1977 pp. 218～220) ②Freud, S. (古沢平作訳 精神分析療法 日本教文社 フロイド選集15 p. 78 p. 104 他)

32) 31)の②と同書「分析医に対する分析治療上の注意」(91～106), 「分析技法における構成の仕事」(217～236) に場面構成上の問題が論じられている。

33) 大きな潮流としては① Adler, A. (1924 Theory and Practice of Individual Psychol.) ② Horney, K. (1937 New Ways in Psychoanalysis) Sullivan, H. S. Fromm, E. らが属する新フロイト派 ③Eysenck, H. J. (1953 Uses and Abuses of Psychol.) ④小論でとり上げている Jung, C. G. らをあげることができる。

34) Jung, C. G. The Realities of Practical Psychotherapy, C. W. 16, p. 332. この事例は C. W. 7, p. 112 でも論じられている。また，彼女によって描かれたマンダラは C. W. 9, 図7・8・9に載っている。

35) Jung, C. G. Definitions, C. W. 6, p. 419

36) Jung, C. G. Psychology. and Alchemy, C. W. 12, 96～97

37) ibid. p. 98

38) ibid. p. 27

39) Jung, C. G. Mandalas, C. W. 9(1), p. 388

40) ibid. p. 389～390から要約。

41) Jung, C. G. Psychology and Alchemy, C. W. 12, p. 103

42) ユングは意識と無意識をつなぐ1つの人格化された姿を anima animus と呼んでいる。①Psychological Types, C. W. 6, 221～223 ②Jung, E. (笠原嘉訳「内なる異性—アニムスとアニマ—」 海鳴社 1976, 63～124)

43) Jung, C. G. Psychology. and Alchemy, C. W. 12, p. 104
44) Jung, C. G. Definitions, C. W. 6, p. 419
45) Jung, C. G. The Practical Use of Dream-Analysis, C. W. 16, 150～151
46) Jung, C. G. General Description of the Types, C. W. 6, p. 330
47) ibid. p. 337～342, p. 378～380
48) Freud, S. 1920 (井村恒郎訳 快感原理の彼岸 日本教文社 フロイド選集4, 1～81で詳しく論じられている。)この概念はメラニー・クライン学派が強く肯定しており，現在でも議論の的になっている。
49) Jung, C. G. The Practical Use of Dream-Analysis C. W. 16, p. 153
50) Jung, C. G. General Aspect of Dream Psychol. C. W. 8, p. 255
51) 旧約聖書 ダニエル書4章10～16, 1966. 日本聖書協会
52) 同書 4章27
53) 描かれた樹本から人格や発達を論じるものに，バウム・テスト—樹木画による人格診断法—C. Koch, 1952 (林勝造訳 日本教文社) がある。
54) Jung, C. G. The Practical Use of Dream-Analysis, C. W. 16, p. 150
55) 細部国明 1978 吃音が持続する幼児をもつある母親の症例研究—夢の活用—日本教育心理学会第20回発表論文集 848～849 では20の夢の系列を第1期：危機，第2期：方向喪失，第3期：回復の3つの時期に区分して考察した。21回目以後の夢は葛藤を意識界で取り上げる自我の強さが形成され，個性化の過程を歩む第4期に続くことが示唆されている。
56) プラトン (副島民雄訳 昭和47年 パイドン 講談社 111～112)
57) ニーチェ (秋山英夫訳 1966 非劇の誕生 岩波書店 p. 137 で取り上げているのも同じ夢ではないかと推測される。)
58) Jung, C. G. The Practical Use of Dream-Analysis, C. W. 16, p. 141
59) ibid. p. 140
60) Jung, C. G. General Aspects of Dream Psychol. C. W. 8, 253～254
61) Jung, C. G. 1964 (河合隼雄 監訳 人間と象徴(上) 河出書房新社 p. 95)
62) Boss, M. 1953 (三好郁男他訳 夢—その現存在分析— みすず書房 p. 44)
63) Ann Faraday 1972 (中野久夫他訳 ドリームパワー 時事通信社 p. 30)
64) Jung, C. G. The Practical Use of Dream-Analysis, C. W. 16, 146～147
65) ibid. p. 155
66) Jung, C. G. General Aspects of Dream Psychol, C. W. 8, p. 256
67) Jung, C. G. The Practical Use of Dream-Analysis, C. W. 16, p. 152
67) ibid. p. 154
68) 河合隼雄 昭和42年 ユング心理学入門 培風館 p. 157

69) Jung, C. G. 1968（小川捷之訳　分析心理学　みすず書房　p. 130）

70) 夢や事例について述べようとすると，どうしても私的な事柄にある程度ふれなければならないので，個人の秘密を守るためには余り詳細を語りにくい事が多い。機会があれば拙者が扱った事例で，本人の了承を得て具体的経過を記述してみたい。

71) Brown, J. A. C. 1961（宇津木保他訳　フロイドの系譜　誠信書房）はフロイトから影響を受けた多くの人たち，またその後の変化や分派について概観している。